

# 東アジア漢字文化圏における識字教育の一例 - 『千字文』『百家姓』と『新集金砕掌置文』 -

小高裕次

## An Example of Literacy Education in the East Asian Chinese Character Culture Area

Qian-Zi-Wen, Bai-Jia-Xing and a Tangut Literacy Education Text

KOTAKA, Yuji

キーワード：西夏語，『新集金砕掌置文』，識字教育テキスト，『千字文』，『百家姓』

### 0．はじめに

東アジアの漢字文化圏は、漢字とその影響を受けたさまざまな表語文字を中心とする文字文化圏である。表語文字は数千字を記憶しなければ文字を使いこなすことができないため、表音文字を使う言語に比べて識字教育テキストの必要性は高いと言える。

現在まで数千年にわたって用い続けられている漢字では、識字教育テキストの歴史は古く、種類も豊富である。一方、漢字の影響を受けて自らの言語のための文字を作りだした周辺諸民族の中にも、独自の識字教育テキストが存在する。西夏人によって作られた『新集金砕掌置文(以下「金砕」と略す)』がそれである。

本稿では、東アジア漢字文化圏における識字教育の一例として「金砕」をとりあげ、中国における識字教育テキストとの比較を通じて、その独自性と中国文化の影響を明らかにしたい。

### 1．中国における識字教育テキスト

まず最初に、中国における識字教育テキストを概観する。中国における識字教育テキストは、伝統的なものと近代以降のもの二種類に大きく分けられる。

#### 1.1 伝統的な識字教育テキスト

中国では、漢代以前から識字教育テキストが存在した。しかし、秦(前 3C)の李斯が作ったと言われる『蒼頡篇』をはじめとして、散逸してしまったものも多い。現存する中国の伝統的な識字教育テキストとしては、俗に「三、百、千」と総称される、『三字経』『百

家姓』『千字文』が特に知られている。

a)三字経

作者は宋代(10C 末 - 12C 初頭)の王応麟(1223 ~ 1296)。テキストの文字数は千字強。文字に重複があり、重複を除けば 500 文字強。三字を一句とし、二句を一連とする。連続する二連ないし三連に押韻が見られる。四書五経など伝統的な文献の学習の必要性を説くとともに、夏・商に始まる中国の歴代王朝の歴史についても触れている。時代を経て増補も行われたようで、筆者の入手したテキストには元朝や明朝についての記述もあった。

b)百家姓

作者不詳であるが、最初の句が宋王朝の姓である趙から始まっていることから、宋代に完成したと見られる。四字を一句とし、二句を一連とする。全部で 70 連あり、総文字数は 560 字。各連の末尾には押韻が見られる。中国人の姓を羅列したものである。

c)千字文

作者は梁代(6C 前半)の周興嗣(470 前後-521)。ちょうど千文字。文字の重複はない。四字で一句をなし、二句が一对をなしている。250 句 125 対で千字になる。各連の末尾には押韻が見られる。内容については後述する。

## 1.2 近代以降の識字教育テキスト

上述の伝統的識字教育テキストとは異なるさまざまなテキストが、清朝末期以降続々と作られた。その主なものは、以下のように分類できる。

d)宣教師による『三字経』

清朝末期にはヨーロッパの宣教師が多数中国に入り、『三字経』のスタイルを踏襲した、識字教育とキリスト教の教義教育を兼ねたテキストを作成した。

e)中華民国期の『千字課』

一般市民の識字教育用に、『千字課』と呼ばれる識字教育テキストが作られた。その後、『平民千字課』『農民千字課』などのテキストも作られた。学習目標として千字程度の漢字を習得することが掲げられているが、テキストのスタイルそのものは現在見られる教科書のようなスタイルで、文字の重複もある。

f)共産党支配地域における『新三字経』

共産党が支配下においた地域では、『工農三字経』『工農兵三字経』など、『三字経』のスタイルをとった識字教育用テキストが多数作られた。これらは、識字教育とともに共産党のイデオロギー教育に大きな役割を果たした。系統的には宣教師による『三字経』と同じである。

### 1.3 伝統的識字教育テキストと近代以降の識字教育テキストとの違い

伝統的識字教育テキストでは二千年以上にわたる中華文化の伝統を身につけることを主眼とするため、多少の手直しはあるものの同じテキストが長期にわたって使用され続けてきた。一方、近代以降の識字教育用テキストでは、その時その時の情勢に応じて次々と新たなテキストが作成されていく傾向にあった。

## 2. 東アジア漢字文化圏における漢字以外の識字教育用テキスト

### 2.1 東アジア漢字文化圏

東アジアの諸言語の中には、漢字の影響を受けて自らの言語を表記するための表語文字をつくり、使用した民族があった。西田(2002)の分類する「変形漢字」「擬似漢字」にあたる文字がそうである。

「変形漢字」とは、「正統漢字<sup>1)</sup>の偏・旁・冠などを自己の言語形に適合させて組み改め、変形した文字(西田 前掲書)」である。「変形漢字」には、中国南部の壮族の言語を表記するのに用いられた壮文字や、ベトナム語を表記するのに用いられた字喃などがある。

壮文字は唐代から用いられていたが、地域ごとに異なる文字が使われていた。字喃がいつ頃から使用されていたのかについては諸説あるが、現在約 6,000 字が知られている。

「擬似漢字」とは、「正統漢字の字形または構成原理を模倣して、新しく創造した文字(西田 前掲書)」である。契丹文字・西夏文字・女真文字がこれにあたる。

契丹文字はモンゴル系の契丹人が中国東北部に建てた王朝・遼の文字である。契丹文字には表語文字と表音文字が存在した。ちょうど日本語の漢字仮名交じり文のように、表語文字と表音文字を混合させた表記方式を採っている。表語文字である大字は 920 年に、表音文字である小字は 924 年ないし 925 年に公布され、遼朝の滅亡後その版図を引き継いだ金朝が 1191 年に廃止令を出すまでのおよそ 300 年弱にわたって使用された。大字はおよそ 1,800 字、小字はおよそ 400 字あり、小字はハングルのように組み合わせて用いられた。

西夏文字はチベット系の党項(タンゲート)人が中国西北部に建てた国・西夏の文字である。西夏人自身は自らの国を大夏国と呼んだが、当時の中国の王朝・宋が「西方にある夏の国」という意味で西夏と呼んだため、現在でも一般に西夏と呼ばれている。西夏文字は 1036 年に公布された。文字数は約 6,000 で、少数の音訳用の文字をのぞいて全てが表語文字である。

女真文字は上述の金の文字である。金朝を建てた民族が満洲系の女真族であったことからこう呼ばれる。大字は 1119 年に、小字は 1138 年に公布された。異体字を含め約 9,000 字が知られているが、大字と小字の詳細についてはまだよく分かっていない。女真文字も契丹文字と同様に表語文字と表音文字を持っていたが、契丹文字のように表音文字を組み

---

1) 正統漢字 漢語を表記するために作られた文字。時代とともに字形と字数は変遷を重ねた(西田 2002)。

合わせることはしなかった。女真文字は 1234 年の金の滅亡後から 200 年後にも使用されていたという。

## 2.2 「金碎」の位置づけ

上記のように、さまざまな民族が自らの言語を書き表すために独自の表語文字体系を作り上げていった。また、『千字文』の女真文字による注釈(現在は散逸)や、『三字経』の字喃による注釈など、いくつかの識字教育テキストも作成されている。しかし、自らの言語の識字教育用のテキストの存在が確認されているのは、管見では唯一西夏語のみである。そのため、東アジアにおける識字教育を研究する上で、『新集金碎掌置文』は貴重な文献であると言える。

## 3. 「金碎」とは

西夏人によって作られた西夏文字の識字教育用テキストが、「金碎」すなわち『新集金碎掌置文』である。「金碎掌置文」とは、「碎金を掌上に置いたような(美しい)文章」<sup>2)</sup>を意味する。

「金碎」の正確な成立年代についてはまだ明らかになっていないが、西田(1997)は「金碎」が金朝の成立する 1115 年以前に作られたものである可能性を指摘している。本文第三九連から第四一連にかけての西夏の周辺民族を対照させた部分において、契丹人の行為については述べられているが女真人については全く触れられていないことがその理由である<sup>3)</sup>。また、西田(前掲書)はさらに一步踏み込んで、「たぶん崇宗の時代(一〇八六-)の作ではないかと、私は見ている」との見解も述べている。

現在、ロシア科学院東方研究所サンクト=ペテルブルグ分所蔵のコズロフ探検隊将来カラホト(黒水城)文献中に二種類の写本が保管されている。また、十枚ほどの小断片がイギリスのスタイン・コレクションに含まれている。

サンクト=ペテルブルグの二種類の「金碎」には、No.741 と No.742 という整理番号がつけられており、どちらも『俄蔵黒水城文献』第 10 巻に収められている。No.741 は、序文と奥書の付いた胡蝶装の完本で、楷書に近い行書で書かれており、読みやすく美しい書体である。一方、No.742 は経典の裏面に書かれた読みにくいもので、書体は稚拙な印象を受ける上に途中で放棄されている。

「金碎」については、西田(1970a,1970b,1997)に簡単な紹介と部分訳が掲載されている

---

2)西田(1997)に依る。

3)第三九連から第四一連の西田による訳を下に挙げておく(西田 1997,p354)。

<small>ミニャク</small> 西夏人は勇敢に行き	契丹人は歩行がのろい
<small>チベット</small> 西藏人は仏僧をあげめ	漢人は皆つまらぬ文を好む
<small>ウイグル</small> 回[骨乞]人は酸い乳を飲み	<small>サンカ</small> 山訛は蕎麦餅が口に合う

が、「金砕」全体の翻訳や詳細な研究はまだない。

## 4. 漢語識字教育テキストと「金砕」との比較

ここでは、「金砕」に影響を及ぼす可能性のあった『千字文』と『百家姓』を「金砕」と比較する。

### 4.1 『千字文』の構成

1.1 節で述べたように、『千字文』は四字で一句をなし、二句が一对をなしている。250句 125 対で千字になる。暗誦しやすいように各対は脚韻を踏んでいる。

小川(1997)は、『千字文』を韻の変わり目によって全体を八つの段に分けた。以下、小川の分類にしたがって、『千字文』のおおまかな内容について述べる。括弧内は連の番号である。

#### 第一段(一 - 五〇)

- 一 a (一 - 一八)...「この世界の自然現象の主なものを列挙する」
- 一 b (一九 - 二六)...「古代の王者の徳化の事例を列挙する」ことによって「作者のつかえた帝王の盛んなる徳を賞めたたえる」
- 一 c (三七 - 五〇)...「個人の道徳について述べる」

#### 第二段(五一 - 八〇)

- 二 a (五一 - 六八)...さまざまな「人々の徳行やその修養のしかた」を説く
- 二 b (六九 - 八〇)...行動の規範を示し立身出世を勧める

#### 第三段(八一 - 一〇二)...円満な人間関係を保つために守るべき礼儀

#### 第四段(一〇三 - 一六二)

- 四 a (一〇三 - 一二二)...洛陽・長安のきらびやかさについて述べる
- 四 b (一二三 - 一三〇)...都に住む将軍や大臣たちの「豪奢な生活を述べる」
- 四 c (一四三 - 一六二)...「春秋の時代における国々の交争」と「分裂していた中国の全土を統一して立てられた秦の帝国の広く大きいこと」を述べる

#### 第五段(一六三 - 一八二)...「国を治める根本である農業について」および「政務にたずさわる士が留意すべき心のもちかた、心がまえについて」述べる

#### 第六段(一八三 - 一九六)...「山林に隠れ栖む」隠遁者の日常や楽しみを述べる

#### 第七段(一九七 - 二二八)

- 七 a (一九七 - 二一六)...「簡素な生活」や「長幼の秩序を重んずること」を勧め、「女性の生活」や「酒もりの楽しみ」に触れるなど、「ごく日常的な家庭の瑣末事」について述べる。

- 七 b (二一七 - 二二八)...前半では「祖先の祭のときの厳粛な様子」について述べるが、後半では家畜の様子から「賊盗」の跋扈へと話題が飛ぶ。

#### 第八段(二二九 - 二五〇)...「特殊な技芸にすぐれた人びとの故事をならべ」て「賞めた

たえ」,「美女の故事」から「時間の流れのすみやかさ」について述べ,「高德の人が朝廷に立つ荘重な態度」と「愚かな人々」を対照させて描き,句末に用いられることの多い「語助」を並べて本文を締めくくる。

## 4.2 『百家姓』の構成

1.1 節で述べたように,『百家姓』は四字を一句とし,二句を一連とする。全部で 70 連あり,総文字数は 560 字である。各連の末尾には押韻が見られる。第一連「趙錢孫李 周吳鄭王」から第五一連「游竺權遠 蓋益桓公」までの 408 字は全て一字姓であるが,第五二連「万俟司馬 上官歐陽」から第七〇連前半の「第五言福」までは二字姓と一字姓が混在し,第七〇連後半の「百家姓終」で本文を締めくくる。

## 4.3 「金砕」の構成

「金砕」は五字で一句をなし,二句を一連とする。百連でちょうど千字となる。『三字経』とは異なり極力文字の重複を避けてはいるが,若干の重複はあるようである。

西夏語テキストの中に脚韻を踏んだテキストがあることはすでに西田(1976)によって指摘されており,荒川(2001)による詳細な研究もあるが,「金砕」が押韻されているかどうかについては,稿を改めて検討することにしたい。

以下に「金砕」全体の大まかな内容を紹介する。筆者は「金砕」の内容から,全体を仮に三つの段に分けた。括弧内は連の番号である。

### 第一段(一 - 二七)

第一段では,西夏を取り巻く世界と西夏のまつりごとを中心に述べられている。

一 a (一 - 一一)...天地の創造・季節と十二支・一日の移り変わりと一年の移り変わりについて述べられている。

一 b (一二 - 二七)...宮中の様子や皇族・官吏の生活や仕事ぶりが述べられている。

### 第二段(二八 - 五三)

第二段では,人名・民族名・王朝名など固有名詞の羅列が続く。

二 a (二八 - 三八)...西夏人の姓が列挙されている。西夏語の単語集である『三才雑字』の「蕃族姓」の部に見られる姓も多い。

二 b (三九 - 四一)...西夏と周辺の諸民族とその行為について述べられている。ここで挙げられている民族は西夏人・契丹人・チベット人・漢人・ウイグル人・山訛人である。

二 c (四二 - 五三)...族姓や音訳用の文字が並び,正確な意味をつかめていないのだが,「李」「趙」「劉」あるいは「唐」「秦」などの文字が見えることから,中国の歴代王朝や人物について述べた部分ではないかと筆者は見ている。

### 第三段(五四 - 一〇〇)

第三段では,西夏人の日常生活について述べられている。

三 a (五四 - 六一)...婚礼の様子や親族名称などについて述べられている。

三 b (六二 - 七一)...豪華な品々と日常的な衣服について述べられている。

三 c (七三 - 八七)...日常生活で用いられる食器などの道具や食料について述べられている。また、僧侶の様子などの記述もある。

三 d (九七 - 九三)...野獣・猛禽・家畜など、身近な動物について述べられている。

三 e (九四 - 一〇〇)...筆者にはまだ正確な意味がつかめていない部分も多いのだが、庶民の日常生活などについて述べられていると思われる。

## 5. 『千字文』『百家姓』の「金砕」への影響

中国の識字教育テキストは、「金砕」にどのような影響を与えているだろうか。

西夏国は西夏・漢の二つの大学院を設置し、中国文化を大いに受け入れた。そもそも識字教育テキストを作成するという発想そのものが、中国の影響を受けて行われたと考えられる。

テキストの形式を比べると、四字一句である『千字文』『百家姓』と五字一句である「金砕」との相違は明らかであるが、本文がちょうど千字であるという点では、『千字文』との関連性が考えられる。

テキストの内容では、「天」と「地」の二文字から始まり、世界の形成について説明するという点では、『千字文』の影響が考えられる(ただし、西田(1997)は納西族トンパ経典との類似性を指摘している)。翻訳とまではいかないものの、「金砕」第一段には『千字文』との漠然とした共通性が感じられる。また、第二段では、姓の羅列という点で、『百家姓』に通ずるところがある。『百家姓』と「金砕」はほぼ同じような時期に作られたことは分かっているが、どちらも正確な成立年代は分かていない。しかし、西夏語で書かれた「金砕」が『百家姓』の成立に影響を与えたとは考えにくい。『百家姓』成立後に「金砕」が編まれ、第二段に影響を与えたのではなかろうか。一方、「金砕」第三段は、『千字文』とも『百家姓』とも様子が異なっている。例えば三 d では、駱駝やヤクなど西夏人にとっては身近な西域やチベットの動物が登場する。生き生きとした自然の描写は、『千字文』には見られない点である。内容全体としては、『千字文』が儒家思想を背景に人間のあるべき姿を説く姿勢が見られるのに対して、「金砕」はより日常生活に密着した記述が多いという印象を受ける。3章で挙げた西夏と周辺諸民族に関する記述には、ユーモアさえ感じられる。

筆者は、西夏文『新集金砕掌置文』は『千字文』そしておそらくは『百家姓』の影響を受けつつも、それに西夏人独自の考え方を加味して作られたテキストであると結論づけた。

## 6. おわりに

「金砕」は興味深いテキストである。完本であるコズロフコレクション No.741 は、我

々後世の研究者に西夏文化を知るためのさまざまな情報を与えてくれるという点で、重要な文献である。また、反故の裏に稚拙な書体で書かれ、完成することなく途中で放棄された No.742 も大変魅力的な文献である。そこには、西夏文字を学ぶ千年前の学習者の姿がありありと浮かんでくる。



## 参考文献

- 荒川慎太郎(2001)「西夏語の脚韻に見られる韻母について - 『三世属名言集文』所収西夏語詩」『京都大学言語学研究』第20号,pp195-224
- 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・中国社会科学院民族研究所・上海古籍出版社 編『俄藏黑水城文献』,上海古籍出版社.
- 河野六郎 千野栄一 西田龍雄 編著(2001)『言語学大辞典 別巻 世界文字編』三省堂.
- 李範文 中島幹起 編著(1997)『電腦処理 西夏文雜字研究』,不二出版.
- 李捷 訳注(1999)『百家姓・三字經・千字文・弟子規』,山西戸籍出版社.
- 西田龍雄(1970a)「西夏」『モンゴル帝国 世界歴史シリーズ第12巻』pp80-86,世界思想社.
- 西田龍雄(1970b)「西夏王国の性格とその文化」『岩波講座世界史 9 中世 3』pp63-85,岩波書店.
- 西田龍雄(1976)『西夏文華嚴經』,京都大学文学部.
- 西田龍雄(1997)「西夏王国とその文化」『西夏王国の言語と文化』pp.291-400, 岩波書店.
- 西田龍雄(2002)『アジア古代文字の解説』,中公文庫.
- 大原信一(1997)『中国の識字運動』,東方書店.